



「社会福祉対象論」の構成：「疎外論」によるノ ート

著者	小倉 襄二
雑誌名	人文學
号	66
ページ	22-40
発行年	1963-03-25
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002501

「社会福祉対象論」の構成

——「疎外論」によるノート——

小 倉 襄 一

Ⅰ アプローチの方法

「社会福祉」理論の構成は複合的であることを特徴としている。現代の科学がにとって複合的であることは一つの宿命であるともいえよう。しかしながら「社会福祉」の理論の展開には、その複合が、迷路のようにいりくみ、さらに関連諸科学の援用があつて、多くの混乱がみいだされる。小稿では、そのような複合と迷路について、研究者のさまざまな見解を分析することを目的としない。また複合的な理論を特定の立場から整序することへの提案をする意図もない。ここでは「社会福祉」の概念とくに基礎的な構成にかかわるものについて、分析をふかめ、従来、「社会福祉」論の系列のなかで、積極的に位置づけられなかった領域を指摘しさらに内容に関する若干の考察を試みようとするものである。「社会福祉」の基礎となる概念の考察には、「対象論」「主体論」「方法論」などの検討が必要である。小稿のアプローチとしては、とりあえず「対象論」から入りこんでみたいと考へる。「対象論」は一つの通路である。対象規定は社会專業が、独自の学問領域であることを主張し、また実践的に他の領域の活動との間に混乱をおこさないために決定的に重要な意味をもっているのであつて、理論の複合と迷路への指標も、「対象論」の理解によって整

理可能な部分が多いと予想される。さいきんの論文のなかでは、主題は「対象論」ではないが忠津玉枝氏の「ソーシャル・ケースワーク論の検討」はすぐれた「社会福祉」への視角を提示している。たとえば、混乱と停滞を続けるわが国のソーシャル・ケースワーク論の現状について、かつて昭和三十二年に仲村優一氏が「総じて、日本の社会事業をめぐる論議は、ケースワークを中心とする技術を外から見る者の立場で社会科学的に批判し去るか、技術の中に閉じこもつて社会科学の視野にまで眼を開こうとしないかの何れかであつて、両者のあいだに建設的な歩みよりの途がまだ開かれていない。技術論の最大の課題は、この両者の橋渡しをする新しい理論を築きあげることにあるといつてはいすぎであらうか」という発言をとらえている。忠津氏は、ここでは、ケースワークを中心とする技術論の圧倒的情勢として、 \wedge 社会科学的に批判し去る \vee 立場と \wedge 技術の中に閉じこもつてしまふ \vee 立場への分裂状態の明瞭な自覚について指摘されていること、さらに、仲村氏のいう \wedge 歩みより \vee が具体的にはどのような内容をもつて提出されるかという発問を行い、この場合、 \wedge 歩みよりの途 \vee といわれるものが經驗的、行動的レベルにおける無論理の平和共存、いわゆるなれあい、を意味するものであるか、領域と対象が異なる故に生れる方法論の相異を前提として、その基底にある科学の普遍性を貫こうとする論理的レベルのものであるかはきわめて重要な課題であり、本質的な問題であると論述している。このアプローチは、ソーシャル・ケースワーク論の戦後の理論―問題状況に緻密に沿っているが、「対象論」の通路から社会福祉の理論構成を求める枠組においても、仲村・忠津氏の提出した「領域」―「論争」をてつて的に深めるべきである。

忠津氏は社会科学派―その立場として、孝橋正一氏の立論を紹介している。現代の社会問題を資本主義制度を貫徹している社会―経済法則からの論理的必然の所産であり、労働者階級とその所屬員にふりかかる制度的苦悩? の表現であると規定し、これらの社会問題の総体(社会的諸問題)から 1 社会問題(労働問題)―生産関係の構造的矛盾から基本的、直接的に与えられるもの。この問題の処理如何は資本制社会の存亡にかかわる。2 社会問題(社会にお

ける関係の・派生的課題)の担い手にかかわる問題。「それは資本主義の構造的必然の所産であり、本質的に社会制度の規定をもったある種の社会的障害の担い手 (Träger der sozialen Schäden) である。それは具体的、現象的には、資本主義制度下の社会生活において、精神的・物質的にあらゆる形態と内実をもった社会的必要の欠乏または社会的障害の状態になやむ労働者〓国民大衆としてあらわれる。(孝橋正一著・全訂版社会事業の基本問題・一四二頁参照)」「対象論」よりのアプローチとしては、とりあえず、この規定の分析から入ってみたい。この点について、さらに社会科学派〓「立場」として、この「対象論」の構造をふかめるべきであると考ええる。

旧稿、「社会事業の客体領域について」(「人文学」第七輯・一九五二年)において、この孝橋氏の「対象論」構成の原型の論述ともいべき「社会事業の基礎理論」にたいして、私自身が提出した〓疑問〓があった。孝橋氏の「対象論」は、発展—修正を経て、忠津氏のいう〓社会科学派〓にとつては、基本的な対象概念としての位置を確保している。しかしながら「原型」の段階において、1社会問題〓問題の所在と発展がつねに資本主義制度存立の基礎にかわり、その人間的表現において(階級的関係の直接的な体现者)として在る領域〓問題が資本主義〓「社会」〓それ自身について、人間に体现する社会について提起されているもの〓社会の基礎的・本質的課題〓「労働問題」2 社会福祉問題〓その問題の所在と発展は、資本主義制度の構造的基礎にふれることもなく社会制度を變革的に規定するものでもない。その人間的表現において社会問題におけるように(階級関係の直接的体现者)としてではなくて、(そのような地盤のうえに關係的に成立するさまざまな社会的障碍の担架者)として在る領域〓資本主義社会という場の、社会における個人について提起されている〓社会の關係的・非本質的課題という要括がなされている。この段階における対象概念のとらえ方に対して、旧稿では次のような〓疑問〓を提出している。

近代的な階級関係(ブルジョアシーとプロレタリアート)の対立が成立することにより、その〓亀裂〓によって、特定の社会集団がその生活や存立の基本条件を〓全体〓としておびやかされ、その問題性が全社会に波及し、その体制そ

のものを八危機におとしいれる必然性Vをもって現われるということが、広い用語、本質的な「社会問題」の一般的性格であること。孝橋氏のいう「社会問題」―社会政策、「社会福祉問題」―社会事業の二系列を区別するとき、八基礎的・本質的Vと八関係的・非本質的Vの基準はたしかに「有効」であったが、私たちにとって、究極的に解明されなくてはならないのは八社会における個人Vと八人間に体现する社会Vの二系列の問題領域が、正しく、全てのことながら資本主義社会のなかで生起する課題であり、二つの領域が、絶対的、形而上学的に分離―対立されるべきではないという事の根柢をどのように理解するか、また、形成された「社会福祉問題」が八関係的・非本質的Vであるとしても、多様な形態で存在するこの領域を、いかにして、資本主義社会の発展法則との関連で―その視野において把握するのか。これは素朴な発問であったが、旧稿の冒頭には「資本という非人間的要素が合理的な姿や形式を通して人間を支配する秩序が出来あがること」「社会問題」登場の出発点なのである」(大河内一男「社会問題とは何か」『社会科学辞書Ⅱ(二頁)』を引用し、つづいて、カール・レヴィットの「人間の自己疎外Vを手引とするマルクスのブルジョア資本主義的世界の解釈」(ウェーバーとマルクス・柴田・安藤訳)の表現を加えている。その箇所の一つに、「資本主義社会において一定の社会的諸関係に基いて、人間の自己意識が八物化Vし、それと同時に今度物は物がそれ自身の尺度になる。物的諸関係が人間を支配する準人格的な力にまで人間化することによって、人間的関係そのものが物化する。この倒錯が八排斥すべき物質主義Vなのである。」(カール・レヴィット)があり、さらに「ドイツ・イデオロギー」の八生産に対する人間の関係が人間自身に対して独立しV、八人間自身の生活の力が人間を圧倒するVという事実、八個人的利害が階級的利害にまで必然的に独立化するV過程において八個人の人格的態度の物化と自己疎外が不可避的となり、同時にそれが個人から独立し、……個人なくして成立する力となる」《Saint Max》などの引用によって、この論点の追究によって、八自己疎外Vが根源的な資本主義的人間像であり、「まさにもたざるものは窮乏のゆえにもてるものは富裕のゆえに、人間の自己疎外に陥っている」(住谷悦治・経済政策原論・二四頁)ことの意味、構造

をとらえる系路を予想している。この段階での△疑問▽や△予想▽は、すでに述べたような、孝橋氏の、理論の発展—充足によっても、十分な解答がでているとはいえない。いぜんとして、「対象論」把握の二系列を区画する△基準▽と△根拠▽、その構造論への△疑問▽は残留しているといえよう。

このような△疑問▽や論点については、さきに述べた忠津氏の論稿が重要な指摘と精密な分析を行った。

本稿のアプローチは、このような「対象論」の追究にあたって、△社会科学派▽と仮りに位置づけられている立場を△マルクス主義の視角▽においてふかめようとする試みである。△マルクス主義の視角▽とは「人間疎外」論の検討によって、旧稿における△疑問▽と△予想▽、あるいは、忠津氏の的確な孝橋—「対象論」への批判をすこしでも解明—前進させてみたいと考える。「社会科学派」の論拠をたしかかなものとするためには、まず、その体系自体がその枠組のなかで社会福祉の理論の基底となる概念を定立しなくてはならない。とくに孝橋氏の理論—そのカテゴリー—はマルクス主義の△方法▽によっている。体系自体の枠組のなかでそのカテゴリーの使用された「位置」を明確にとらえなくてはならぬ。この作業—基底の構成をあいまいにして、無原則な複合的理論の癒着、援用は避けなくてはならない。「人間疎外」についてのマルクス主義の見解は、ここで主題とする「対象論」のみならず、社会福祉の理論全般に新しい指標を導入する契機となるであろう。また、平板な論点の羅列や複合を整理する視野を拓くかもしれない。

Ⅱ 「対象論」における疎外の問題

「社会的問題」（社会福祉問題）についての孝橋氏の説明によると、社会的問題、したがってそれへの社会的対応としての社会事業は、資本主義制度の歴史的・社会的所産であり、その構造的必然の所産であること、社会事業の対象は何かと問うとき、人々はまず、貧困者、浮浪者、売春婦をはじめ、傷病者、身心障害者や貧困または扶養者のない児童、未亡人（母子）・老人などを思い浮かべる。そして社会事業の対象はすぐれて社会制度の所産であるというとき、

病者や、身心障害者あるいは扶養者のない児童、生計支持者に死別した妻や台風・地震などの被災者は、時代の区別を問わず、制度の形態をこえて、（或は、現象的に貧富にかかわらず…小倉）存在してではないか。これが△反問△のかたちである。孝橋氏は、この敘述のなかで、なぜこれらの一群の人々が社会事業の対象であるかをたずねようとはしないと考へ、「社会的諸問題」はそれ自身前提的に、あるいは単純に、社会事業の対象としてあるのではない。つまり、個人の自己責任において一定量の所得⇨購買力の獲得と確保が生活手段として絶対的に必要なこの特定の社会制度のなかに住みながら、これらの人々には生産手段の非所有はいうまでもないことながら、みられるような事情や事故にもとづいて、購買力獲得の能力や機会を欠くかまたは、まったくそれを失ってしまったので、生活上の社会的必要が充足されず社会的障害状態になやんでいるのだと規定する。そして、家族制度の抱擁、隣保集団の相互扶助も崩壊しており、「近代的社会の生活原理と様式」「資本主義制度のもとに生活する労働者⇨国民大衆を全社会的に規定するもの」が横たわっている。このように労働者⇨国民大衆にその担い手を見出す社会的障害は、それがすぐれて社会的起因をもつ場合はもちろんのこと、たとえそれが自然的起因をもつものである場合においてさえ、「資本主義制度の標造的規定」をまぬがれることができず、ここに社会的施策体系としての社会事業の「社会制度的制約」が存在している。このことは、社会の問題が「資本主義制度の構造的必然の所産」であることを意味している（孝橋・「社会事業の基本問題」一五四—一五五頁参照）。このような△説明△のなかに、△社会科学派△の対象把握が「経済問題」に限定されているとか、経済一元論の論理であると理解される根拠があり、「社会問題」と「社会福祉問題」の二系列に区別して、それぞれ固有の対象領域とする必然性が稀薄になってくる。忠津氏の説明では△一般的危機の段階△において、それが精神的⇨心理的傾向をおびることはあっても、精神的⇨心理的傾向といえども本来的には物質的、金銭的に置換し得るものである解釈されている。従って社会の問題のすべては社会性を措象して経済問題として扱われているとみられるのである（ソーシャル・ケースワーク論の再検討）、このことは、さきの孝橋氏の△説明△のなかで、やや反復的に使用されている

「資本主義制度の構造的規定」とか「社会制度的制約」という概念を「対象論」に固有のものとして成立させるためには、この規定、制約のメカニズムそのものを追求すべきであった。社会科学派に対する批判の立場とは、社会的諸問題について、資本主義制度の構造的規定の忘却にたつことの指摘というよりも、構造規定制約のメカニズム正に社会における個人についての内容に關する具体的な説明を期待しているべきなのではないだろうか。社会科学派によるとしても、「資本主義制度のもとに生活する労働者国民大衆」という人々のもつ属性や条件とは、「児童、未亡人（母子）、老人、傷病、廢疾者などといったようなこれらの人々のもつ属性や条件」と、それらにもとづいて「社会事業の対象の種類がその上に成立している」という孝橋氏の論述をさらに追究してみる余地があるように思われる。

疎外された労働

孝橋氏の「労働者国民大衆」という定式、その説明としての属性条件の論理が有効であるためには、「個人」のすべては、現に雇用され、就労しているか、あるいは離職し、休業しているか、さらにその家族員として家計補助のために労働するか、あるいは家事や学業・遊戯にいそんでいるであろう。またはじめから労働の機会や能力をもっていないものであるかもしれないし、労働者である家計支持者を失なった児童・未亡人（母子）・老人であるかもしれない。しかし総じて、現に労働者である本人自身はいうまでもなくその他の家族員や非労働者とみられるこれらの人々のすべてが、その窮極において労働者階級の所屬員であるという事実と認識をさまたげる何ものもそこにはないはずである」と概括するだけでは十分といえない。忠津氏の指摘にあるように、ここに、社会問題と社会問題（基本的派生的）の分類の「基準」についての疑問が提起されてくる。すなわち、窮極において労働者階級の所屬員であるという事実と認識は、「労働問題が進行する過程とその内容が労働力再生産過程となって進行する過程」とは、あくまで別個の現象であることを確認しつつ、この二つのもの混同を回避することから、この二つの問題系列が「同一本

質（資本―労働の階級対立）の単に異なる二つの局面にかかわる現象であることを見すごしてはならないこと。（忠津論文）その視点から、ただちに「資本主義社会での労働者の社会生活は、人間としての本来的な生活過程が資本の手段となつて疎外されている」という解釈に入る前に、以下の論証が必要であろう。

△技術論的立場▽―「主体的側面〓個人の内面性にかかわる行動のメカニズム―微視的〓人間性」の重視―それに対して「制度・政策（社会科学派）の見地から阻害された人間の精神諸活動〓人間性の回復・発達への対処―ソーシャル・ケイイスワークの有効性の検証不足」つまり「貧すればドンする」というような常識をもつて軽視した」という△技術論的立場▽からの見解への△批判▽に対して、どのようなカテゴリーから説明がなされるべきかという問題である。たとえば、ヘルバート・マルクーゼの「経済学的労働概念の哲学的基礎」によれば、次のように「労働と人間」の基本的な△把握▽を行っている。

(1)労働の対象は、それが単に特定の形状をもつた世界のなかに生じたというだけで、人間をその世界の特定の歴史性のもとにおしこみ、それによって労働する者自身の歴史性をも現実的ならしめる。(2)人間は労働することによつて、まったく、具体的な歴史的状况のなかに「能動的」にはいりこみその現在と交渉し、その過去をうけいれ、その未来に働きかける。(3)労働のなかではじめて、また労働のなかのみ、人間は歴史的なものとして現実的になり、歴史的発生のなかでその特定の立場を獲得する。(4)人間が労働をとおして「能動的」歴史になるところ―このことはまさに労働の対象のなかに表現される。労働する者はいわば労働しながらの労働の対象のなかにはいりこむことによつて、働きかけられ、あるいは働かざられた対象のなかで、歴史的生活時間のさなかで持続し現存し「客観に」現実的であり活動するものとなる。（H・マルクーゼ：「初期マルクス研究・宮知・池田訳一三〇―一三二頁参照）

個人の人間性―行動のメカニズムにとつてこのような「労働」は決定的な意味をもつ。マルクーゼは、歴史的状况に「能動的」にはいりこむことをとくに人間が労働すること▽の現実化の意味としてとらえている。技術論的立場の

△人間像▽には歴史的状况への能動的対応として個人の行動メカニズムをみる点において欠陥がある。「機械を操作している人、鉱山で石炭を採掘している人、カウンターの後でサーヴィスしている人、官吏として官僚機構に組み入れられている人、科学者として教えている人―そのいずれの場合においても、その人間はかれにとってのみ固有なその自我の領域からぬけでて、すでに配分され組織され、形成され、さまざまな身分、職業階級等々に応じて分化せしめられた環境のまったく特定の場に歩みいったのであり、その環境の成員として特定の立場を占めている」(マルクーゼ)そして、このような先在する労働の状況は、歴史的世界とその発生内部での一回かぎりで、とりかえることのできない「立場」のなかに個人を定着させること。その「立場」にもとづいてこそ、個人の定在やかれの状況の受容や変更の可能性が附与されること。労働にはいる前や、労働の外部では、いいかえると生産と再生産に役立つ実践にはいる前や、その外部では、人間の定在は多くの可能性をもちつづけることはできるがいかなる可能性をも実現することができない。労働をとおして……かれの定在は「歴史的恒常性」を獲得したのである(マルクーゼ)。このような「労働」の本源的な構造を、マルクスは単に経済学的専断だけではなく、人間の疎外、△生▽の価値剝奪、人間的現実の転倒と喪失と考える。「外在化された労働、いいかえると外在化された人間、疎外された労働、疎外された生、疎外された人間の概念」であるとのべている。マルクーゼは、マルクスの労働概念のごく暫定的で、一般的な特徴づけでさえも、経済学の範囲をはるかにこえて、統体性のなかでとらえられた人間の存在が研究テーマとされるような次元にみちびかれた。そして、マルクスにとって、人間の存在と本質はどこから、またいかにしてさだめられているのかという疑問に答えねばならないと指摘する。

マルクスの「人間論」は、(1)人間はともかく肉体的な意味で生存できるためには、自己の生活手段として有機的および非有機的な対象的自然をたよりとし、また直接「欲求」におされて、自己の対象的世界を飲食物、衣服、住居などの対象として生産する(取得する、加工する、準備するなど)という専断だけが考えられているわけではない、(2)マルク

スは、ここで「精神的な非有機的自然」とか「精神的な生活」について語り、人間の普遍性は「動物の本質的制約性とはことなり」へ自由Vであるという。人間の労働の本質は「自由V」であり、人間は動物のように特定範囲の存在物に制限されてはいない。かれは単に自己の直接的な生命活動の環境として対象を手にいれるだけではなくて、あらゆる存在物に対して開放されている。人間は、「全自然」を再生産し、たとえこの生産が直接的欲求をみたさない場合でも、それを転化させ取得しながら、かれ自身の生活とともにおしすすめる。なぜなら、このような生産行為のなかにこそ、人間の現実的存在があるからである。(マルクーゼ)マルクスにとっては、人間は、「对象的な、つまり物質的な存在諸力をささずけられ、またあたえられた存在」であって、現実的对象に対して「作用し」、「現実的で感性的な諸対象に即してのみかれの生命を発現できる」のである。そこで、マルクスは、対象化とそのなかにあらわれている分裂の根をさらに一段と深く人間の存在規定のなかに求めようとする。それは「感性」(対象をとおして触発される感官をもつこと)の問題である。この次元では窮乏や窮乏、また人間に前提された対象性への依存は、感性をとおして人間の存在そのもののなかに根因をもっていると考えている。マルクスによれば、人間は「自然的・感性的・対象的存在として、苦しみをうけ、制約され、制限された存在」である。「感性的に存在することであり、したがって、对象的・感性的存在としての人間は苦しみをうける存在であり、また自己の苦悩を感じる存在であるために、情感的な存在である」とも述べている。マルクーゼの説明によれば、このマルクスの「感性」による人間の存在規定「とくにへん外された労働Vのなかで表現される人間の窮乏や窮乏が単に経済的なものではないように、感性のなかにあらわれる窮乏、窮乏も、単に認識どおりのものではない。この窮乏や窮乏は決して人間の一つ一つの態度に関係するものではなく、むしろそれは人間の全存在を規定するものであり、人間の存在の存在論的カテゴリーであるという。このことは、人間の「生命活動」として、「労働」をすべての経済学的意味をこえてつかみ、「労働」の概念を「自然的」かつ「感性的」存在という人間の規定と関連させることの必要性を指摘する。「対象」は直観の対象ではなく、「欲望V」の対象であり、人間の

諸力能、△本能√の対象でもある人間は労働のなかで、対象の単なる物的性質を止揚し、対象を自己の生活の場で生活手段とする。そして労働の対象領域とは、共通の生命活動の領域にほかならず、人間にとって他の人間がその現実態においてあきらかになるのは、労働の対象においてであり、また、それに即してであるといわれる。ここにも「対象化」の基本性格があり、労働のなかで、活動しているのは、孤立した個人ではないし、労働のなかにこそ、特殊的に人間的な一般性が実現されており、対象化は本質的に「社会的な」活動であり、対象化する人間は本質的に「社会的」な人間であるということになる。(マルクーゼ・初期マルクス研究九—四二頁参照)

「社会的な人間」の存在としての△労働√は、資本主義において変化する。人間の生命活動である労働の担い手∥労働者は、マルクスの規定では彼の労働のなかでは、自分を肯定しないで、否定する。……したがって、労働者は労働から離れた場合に、はじめて、自分のもとにあると感じ、労働のなかでは、自分の外にあると感じる、労働は欲望の充足ではなくて、労働の外にある欲望を充足するためのたんなる手段にすぎない。労働は、その真の意味、すなわち、人間の自己実現を可能にするものとしての意味を失ってしまう。自己の生命を表現し充実させるための媒体ではなくて、たんに生計を確保するための方策にすぎないことになる。F・パッペンハイムによれば労働が商品としての機能を営むことのできるのは、人間の熟練や知的能力や創造力や創造的才能が一言でいうと、労働の土台になっているところ、人間のいろいろな性質が—彼の人格から、引き離される場合だけである。それらのものは、資本と同じ仕方、つまり上手な経営や、投資を通じて価値を生みだすところの基金として、取り扱われなければならない。労働者は、労働者として存在するためには、△資本√として存在しなければならぬ。労働者は、彼を使用する資本が存在するかぎりにおいてのみ、資本として存在することができる。資本の存在は彼の存在であり資本の存在は彼の存在であり、資本はどこまでも彼の生活に無関心であるにもかかわらず彼の生活の内容を形づくる。この運命に服従している労働者は、人間の形をしている商品すなわち自分自身のものでなくなつた、自分自身から疎外された個人であり、それ以外の何物で

もないことになる。(「近代人の疎外」・岩波新書・一二二—一三頁参照)

資本主義的生産過程、すなわち労働過程と価値増殖過程との対立物の統一においては主体は資本であって、労働ではなく、価値増殖過程であって、労働過程ではない。パッペンハイムでは、労働過程は資本家が購買した諸商品のあいだの一過程にすぎなくなることを描いている。すなわち、労働過程は人間性と人格を形成する過程ではなく、これを疎外するものとなる。そして、資本主義的搾取においては交換価値の追及が目的となり、剰余価値への欲求も無制限となり、資本主義的疎外はいぜんのどんな疎外よりも徹底的となる。

△社会科学派△の基本カテゴリーとして、△労働△を確認し、その現実態を、マルクーゼや、パッペンハイムの説明の展開に沿って考察すると、社会的諸問題—の対象論から、窮乏、失業、生活崩壊を、資本制社会の基本矛盾である経済的側面にかかわる現象として、ただちに、ソーシャル・ケースワークの有効性への不信を表明する見解の再検討が要請される。忠津氏によれば、「ソーシャル・ケースワークが資本制社会の構造的矛盾—本質をあいまいにするものであるとして、あるいは、その直接的対策としての社会政策、社会保障の拡大、強化を阻止する働きを担っているものとしてその反動性を批判してきた。ソーシャル・ケースワークの側では、同じ論理の平面上で、自らの存在理由を発見しようとする形でこれに反撥してきた」(「ソーシャル・ケースワーク論の検討」)このような批判—反撥の次元ではとうてい正当な理論の構築は不可能というべきである。忠津氏においてはソーシャル・ケースワークの技術(および一連の心理的技術、カウンセリング、ガイダンス、心霊療法)の要請される「事態」として、たとえばノイローゼ(不眠症・消化器疾患などを含む)、自殺、少年非行、離婚といった文化の頹廢現象は本質的に生活上の社会的必要の不足△、△資本制社会における労働者の窮乏△と同じものでありながら、具体的な対応策として金銭的援助では直接緩和できない性質のもの—として例示している。対象論からいえば、このような「事態」に対して、△社会科学派△の判断が停止したり、忠津氏のように、(社会的諸問題)を経済学の対象としてとらえ、他は教育学(人間性

発展についての科学)の対象として、夫々独自の領域でまとまった全体として分析・検討するといふかたちで、結論をいそぐ必要はないであろう。社会科学の立場としては、その基本的カテゴリーのうち、自己展開・深化として追究しうる「場」が積極的な意味でのこっており、この「対象論」の徹底化によって、技術論・ソーシアル・ケイ・スワクの要請される事象を説明することの通路もひらけるのではないだろうか。

Ⅲ 「社会福祉問題」と「疎外」

疎外とはいちおう「人間自身の行為(とその結果)がかれによって支配されるのではなく、かれを超え、かれにさか
らう異質の力となる」(マルクス)ような人間の状態であると考えることができる。しかし、このように理解したとき、
疎外の問題は、第一に人間の行為であり、第二に、その結果としての異質の力の現実化であり、第三には、その異質
の力と人間の関係である——とくにかれを超え、かれにさからうような関係である。(日高六郎・「現代における自己疎外」
・思想・一九六二年一〇号)、日高氏は、アメリカの社会心理学者シーマンの『疎外の意味について』(On the Meaning
of Alienation)の論文の紹介において、五つの用語法について説明する。(1)「無力さ」powerlessnessであつて、こ
れは、マルクスの資本主義社会における労働者の条件についての考え方に由来し、個人が求める結果が求めている結
果や、あるいはその補強にとつて無力であるという予想(2)「無意味さ」(meaninglessness)——個人がなにを信ず
べきか不明確であり、意思決定の明確さについての最少の標準も存在しない状態(3)「無規章性」アノミー概念から
引きだされへあたえられた目標達成のために、社会的に承認されていない行動が求められることが予想されている状
態(4)「孤立」(Isolation)へ知識人のばあいにしばしば起るが、ある社会で高く評価されている目標や信念にたいし
て、低い価値しかみとめないこと(5)「自己疎隔」(self-estrangement)へ人間が自分自身を例外者として経験す
る経験様式、人間が自分自身から遠ざかってしまったこと(さらにディーンという社会心理学者が、この五つのうち、

「無力さ」「無規準性」「社会的孤立」を疎外の主要構成因子とし、「疎外」の概念の流行と関連するものとして、無関心、權威主義、同調性、浮浪性、政治的無関心、政治的過敏行動性、偏見、私生活化、精神異状、退行、自殺などをあげ、社会心理学的文脈でとらえており、日高氏は、ここに「疎外」概念の通俗化がみられるといっている(前掲論文・参照)。この社会心理学的文脈→通俗化という批評によってとらえられた「状況」は社会福祉の対象領域として、ハソーシアルケースワークの機能▽が要請される「状況」でもある。前項では、社会科学派の「対象論」としては、「疎外された労働」＝基本的カテゴリーをとらえ、あえて、「基底還元」のアプローチを行う必要を提起した。基底還元のアプローチからハ疎外に関連するもの▽としてとらえられた領域への到達には、「日常生活批判」(アンリ・ルフェーヴル)を媒介としなくてはならないように思う。ルフェーヴルの『疎外と人間』によれば、「疎外」の概念や領域、いわば、その管轄は何処で止まるのか」という発問によって、回答を展開する。「日常生活」という概念には、不明瞭さ、曖昧さがある。労働、社会的諸関係、家族的諸関係などが区別なく集められて含まれる生活全体なのか? ルフェーヴルによれば、「日常生活は、生産物と欲求の遭遇によって定義される。生産はそこで財貨となる。日常生活批判は、経済学者たちの見るような消費とは一致しない。それは、生産の領域を斥けはしない。専実、労働者が外において満ちそうとするさまざまな欲求や渴望の一部分を獲得したり、感得したりするのは、生産的労働の中においてである。一人の同一の人間が、三つの区域において生活し行動する。すなわち、職業的活動、直接的関係(家族的・社会的)、閑暇や教養の三つである。それらは、お互いの中に反響する。お互いの中に自己を再発見し、あるいは自己を疎外する。→マルクスの意味における「経済学批判」を含み、それを包み込んで、経済活動に基礎と置きながら、それをはみ出る「社会的人間」に到達しようとするのとべている。(四二―四三頁参照)

さらにルフェーヴルは、日常生活を、(1)現実的なものに支配される区域と支配されない区域であり、それらのハ遭遇▽、ハ交換▽、ハ葛藤▽の場である。(2)日常生活における男女は、「正確には生産の技術ではない幾つかの「技術」

と利用する。(3)日常生活では未だ知られても、支配されてもいない事柄(卑近な例)健康や疾気の問題、性的問題あるいは、さらに予測し難く、執拗で、情念的な側面をもった諸々の欲求それ自体)の餌食となっている。(4)日常生活では、彼等は、自分たちが実際に生きているのは別の生き方をしていると思ひ込んでいて、彼らと彼ら自身との間に諸々の映像や△典型▽を挿入する。彼らは、△劇化▽したり△散文化▽したり、△賞揚▽し△貶下▽したりする(「疎外と人間」四四頁)。

△社会福祉問題▽の領域―日常生活とその△批判▽の描出とみて、しかも、「日常生活を批判することは、それを非難し、貶しめることではない。その反対だ。〃その中で、実質的な富であるものと現実には貧困化(疎外)であるものとを認識することに計画があり△富と貧▽、これが日常生活の弁証法である」(弁証法的思惟の運動として、積極的認識は、否定的契機たる批判のただ中において構成される)。この「日常生活批判」は二つの分析から出発する。(1)人間的なるものを実現を、研究に値しないとされているもの、(例えば遊びとか、あるいは、さらに日常的なつましい欲求の一見浮薄な形づけや様式化)を含む、その多様な様態において回復すること、ルフエトヴルによれば「社会的・文化的人間による自然人間の疎外(歪んだあるいは作りものの欲求、抽象的な動機づけ、欲求に対する意識の幻想)」と「自然的人間による社会的人間の疎外(本能的なもの、生物学的なもの、あるいは生理学的なもの)の再出現、極度の窮乏においてであれ、極度の満足においてであれ―生起するそれらの乱暴な再出現」とを区別する。第二に、いかにして、主体性が獲得され、存在し、次に道に迷い、みずからを切離すことによつて、諸々の物神のなかに自己喪失(自己疎外)するかということ……そして、疎外の多様な様態は、人間による自己実現の諸様態に伴い、あるいは、それに従うことの確認……の条件をあげている。

このような「日常生活批判」の解明から、ただちに「社会福祉対象論」が明確になるというのではない。「△社会的諸問題▽が、現象的には、単に悲惨な貧窮状態としてではなく、一定の生活水準の向上、消費のゆたかさ、総じて、物

質的基礎の一定の強化と安定がドミナントになる状況」のなかで、ノイローゼ、アルコール中毒、麻薬耽溺症、自殺、非行、離婚といった広汎な人間疎外の状況が目立つこと」（忠津論文）についての「疎外論」からの説明にすぎない。さまざまなヴァリエーションをもった病識、病理、偏倚、不調整といった概念を社会福祉論に援用するよりは「疎外」の基本的なメカニズムを解明することが対象論の構成にとって有効であると考える。前項にのべたように、日常生活批判への到達には、「疎外された労働」の歴史的・社会的な枠組があり、「労働生産物の疎外」「労働の疎外」「人間の類的生活の疎外」「人間の自己疎外」等の疎外化現象の四つの側面の内容に規定されている。「経済学的諸範疇を『疎外された労働』の展開形態として把握することによって、この一連の疎外化現象を人間価値、人間本質の顛倒形態として規定することさらにいいかえれば、本来は人間活動の対象化、現実化の結果にはかならない経済学的諸範疇の非人間性、疎外性のなかに、根源としての、本質としての労働を認めることによって、人間労働の主体性を復元しようとする意図、それが『疎外された労働』の認識の意図である。」（官本善男「資本論研究序説一六頁）。忠津氏の適切な例示によれば、人間が労働力商品としてしか存在し得ない資本制社会においては、人間の生活のいとなみそのものの内容をなす労働の過程は生活資料をうるための単なる手段になりさがる。一次的に商品としての労働力を販売できないもの、またしようにしない者は、生活資料を入手できないために窮迫する。二次的には、活動の過程そのものからはじき出されることによって、人間性の発現が抑圧される。労働力を購入する資本にとっては労働は価値増殖―剰余価値の創出の目的に従属して、非人間的強圧を人間に課する。その目的を達するための手段として、その合理性の貫徹には、いささかのためらいもない。（オートメーション化された職場での「合理化」の抑圧強迫衝動に苦しむときは、産業カウンセラーの許をたずねあるいは神経科で心理治療をうけねばならない。高校進学率を向上させるために多くの中学校における差別的学級編成やつめこみ主義の補習授業とによって能力競争からはみだしたり、否応なく就職コースに編入された中学三年生が非行に走るときは、学内の生活指導によってあるいは学外の福祉司によって、彼らに人間としての誇りを回復させ人間性の十全な発展を援助しなくてはならない―忠津）

このような非行中学生や身体障害者、精神薄弱者のケースは生活資料を入手する手段としての労働において、「疎外された労働」において、生活資料を入手する手段としては、労働力商品として相対的に不利な条件にあることに對する人間的な抵抗であると同時にそれは、そのまま疎外された労働そのものに對する抗議となる。このことは、ルフェーヴルのいう「日常生活批判」の規定する「状況」として「社会福祉問題」の領域を形成する。この分析の経路にくみこまれた人間の欲求について、マルクスは「労働者の場合に外在化や疎外の活動としてあらわれるものがすべて、非労働者の場合には外在化や疎外の状態としてあらわれる」とのべていることが重要である。「人間の自己疎外の直接的に社会的な表現としてのプロレタリアート」についてのレヴィットの説明では、「一有産階級もプロレタリアートも実は同じ自己疎外を表わしている。しかし一方の階級がこの自己疎外に對する批判的意識をもたずに、そこに自己の幸福と保証を見出すのに對して、他方の階級は、自己の人間喪失を意識し、それ故に自己を止揚する非人間である」プロレタリアートは言わば「商品」の自己意識である。……経済が人間の宿命であることはプロレタリア階級の中に最も鮮明に現われている。」という。さらに、レヴィットによれば「自己疎外の把握がより具体的になるのは、それが、一つの抽象的経済的な「要因」に、因果的に結びつけられることによつてではなく、それが、專一的な生活関係の具体的な、分化せる連関の中にくみいれられること——人間という「範疇」が具体的、歴史的に規定されること——によつてである」と『ドイト・イデオロギー』の表現を引用して敘述している。(カール・レヴィット・ウエーバーとマルクス・柴田・他訳一〇八一—二頁参照)

社会福祉理論における、△調整▽、△自立▽△復元▽……などの論理をこのような「疎外」——「対象論」に投射してみると、体制—政策概念との関連において△無力さ▽、とくに△無規準性▽ normlessness があらわになるように思われる。忠津氏は人間疎外の状態は、個人の社会に對する単なる不適応現象ではない。従つて、個人の心理的メカニズムに解消できる性質のものではないと指摘しつつ、ソーシアル・ケースワークの要請として、人間疎外が一人一人の生活

のヒダに深くいこんで、一人づつ異なった多様さをとって具体化されるものである以上、それは個別的に展開されざるを得ないとし、感性的認識のレベル、心理的メカニズムの問題に言及し、とくに、クライエントとワーカーの「面接」の次元における状況を描いている。つまり、「疎外」の事実をあいまいにしたり、「軽視」してみせたりする心理的緩和感、「疎外」との対決の回避するか、ワーカーが目的意識的に、クライエントが、リアルに「疎外」に直面し、それと主体的に対決できるようにのみ、心理的諸条件を調整することになるのかという相違を結果するとみる。つまり、仲村優一氏の設定する△社会的方向感覚√、△現実変革のエネルギー√というケースワーク過程は、後者を指すと思わせると推察している。

「疎外論」を作業概念として対象の構成を考えることによって、ソーシャル・ケースワークのみならず、グループ・ワーク、コミュニケーション・オーガニゼーションにおいても、さまざまな理論の可能性がひらけてくると思われる。「政治的变化、すなわち体制や経済的構造（生産関係）を改変する諸々の変化はそれらが日常生活を変える限りにおいてしか人間の関心をひかない」あるいは「改良と革命との間には二律背反的な矛盾はない」（ルフェーブ）という表現もある。基底遺元的なアプローチとして「疎外論」をふかめながら、△社会科学の立場√がすでに証明しているように、疎外形態のはげしい変容、複雑な形態を、社会福祉のそれぞれの「方法」に沿って、検証していく仕事が未開拓に残されているといえよう。

使用文献・忠津玉枝「ソーシャル・ケースワーク論の検討」（社会問題研究十二巻・二・三号）

カール・レヴィット「ウェーバーとマルクス」柴田・脇・安藤共訳 昭二四・弘文堂

アンリ・ルフェーブ「疎外と人間」森本和夫訳・昭三七年 現代思潮社

ヘルバート・マルクーゼ「初期マルクス研究」音知・池田訳 昭和三六年 未朶社

カール・パッペンハイム「近代人の疎外」粟田賢三訳 昭和三五年 岩波書店

「社会福祉対象論」の構成

「社会福祉対象論」の構成

孝橋正一、全訂版「社会事業の基本問題」昭和三七年 ミネルヴァ書房

宮本義男「資本論研究序説」昭和三二年・ミネルヴァ書房

その他、「資本論」(向坂訳)、芝田進午「人間性と人格の理論」、務台理作「現代のヒューマニズム」・「思想」―現代の人間疎外・
一九六二年一〇月号、など。